2017年度　入学試験問題

国　語

（1科目100点50分）

2017年2月14日（火）1時限目実施

1. **試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。**
2. **この注意事項は、よく読んでください。**
3. **試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。**
4. **次のことには十分注意してください。**

① 解答用紙には、受験番号を記入することを忘れないこと。

② 答えはすべて解答用紙に記入すること。

③ 不正行為はしないこと。

解答については、間違いのないように十分注意し、記入してください。

東 奥 義 塾 高 等 学 校

〔一〕放送をよく聞いて、後の各問いに答えなさい。

※メモを取ってもかまいません。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

南仏※1プロヴァンスに生まれたセザンヌは、画家になることを志してパリに出る。しかし晩年は、再び故郷のプロヴァンスに戻り、そこにそびえ立つサント・ヴィクトワール山を、何度も何度も描き続けた。見る場所によって、季節によって、そして自分の気持ちによって姿を変える山にセザンヌは大きく惹(ひ)かれ、油彩四十四点、水彩四十三点、加えて多くのデッサンを残している。私はそこに、画家の鋭意、本書の言葉で表現するならば、セザンヌの「退屈力」の大きさを感じる。

ごくふつうの人であれば、サント・ヴィクトワール山を見ても、「あれが、セザンヌのサント・ヴィクトワール山ね」ですませてしまうだろう。セザンヌのことを知らなければ、「ああ、山だね」で終わってしまうかもしれない。山の細部まで見るなどというのは、なかなかない。

（Ａ）、いろいろな物を描いてみたいと思っている画家なら、一度描いた山は、「あれは、もう描いた」と、一応の決着をつけるだろう。再び同じ素材に挑戦することもあるかもしれないが、八十点以上というのは考えにくい。

しかしセザンヌは違った。固定観念にとらわれず、いつも、サント・ヴィクトワール山と初めて出会ったように描き続けた。何度も何度も山と出会いなおす。（Ｂ）細部に入り込んで出会いなおす。そして表現を試行錯誤しながら、飽きずに同じ山を描き続けた。

もともとセザンヌは、何度も描きなおしをする画家として知られていた。当初のデッサンから完成作品が大きく変化していることは珍しくなかった。サント・ヴィクトワール山の絵を眺めていると、セザンヌが、山の「見え方」「あり方」を※2虚心坦懐(きょしんたんかい)に受け止め、なんとかカンバスの上に表現しなおそうとしている強い気持ちが伝わってくる。そして同じ山なのに、表情が多彩で、多くの顔を持っていることに驚かされる。

セザンヌは、後の絵画の歴史に大きな影響を与えたと言われるが、①この一見地味に見える探究心なくしては、絵画史上における革命的な業績は残せなかっただろう。

最近、私はオランダのアムステルダム国立美術館から来た、フェルメールの「牛乳を注ぐ女」を見に出かけた。フェルメールは十七世紀オランダの画家だが、彼の絵には、とても静かな時間が流れている。「牛乳を注ぐ女」を目の前にして、私は、②ぐーっとひきこまれてゆく自分を実感した。細部にまでぐっと入りこまされて、なかなか抜け出てこられなかったのである。一筋の牛乳が垂れている白い線、光線の具合、そこに置いてあるパンの質感といったひとつひとつが、飽きさせない力を持っていた。美術館で複製画を購入し、家に帰ってきてから複製画を眺めている。そしてそのたび、本物を見たときの印象を思い出すことができる。まさに、これが名画というものだろう。

しかし、「牛乳を注ぐ女」が描いているのは、とりたてて劇的な瞬間ではない。生活の中のありふれた行為だし、牛乳を注ぐ女の人の生活自体、退屈だったはずである。しかし画家は、ありふれた題材として、その情景を斬(き)って捨てはしなかった。丹精こめて、その一瞬をカンバスの上に表現していった。するとどうだろう。きらびやかな色を使っているわけではないのに、重い空間が出現した。ありふれた日常をきりとっただけの情景が、女性の存在の充実した空間に変化

した。この絵については、真面目な働き者のオランダ女性を美しく描いた作品だとして、オランダ政府が流出をくいとめたという逸話がある。つまりフェルメールの目には、その情景の中の充実感が映っていたのであろう。それを、大変な根気で仕上げていくことで、他の人にも感得できるものに変えてしまったのだ。当人はもちろん、絵を描くことを楽しんで行っていたに違いないが、そこに、画家の「力」を感じずにはおれない。

ダ・ヴィンチが「モナ・リザ」に対してとり続けた姿勢にも、同じような態度が見える。ダ・ヴィンチは長い年月をかけて、「モナ・リザ」に手を加えた。繰り返し行う作業の中に喜びを見つけて、持続したのである。

いきなり私の子ども時代の話になるが、私はビー玉を二十個、いつも袋に入れて持ち歩いていたときがあった。ラムネのびんに入っているような、何の変哲もないビー玉である。私はいつもそれをポケットに入れて、たびたび袋から出して遊んでいた。そのうち、自分の好みのビー玉というものができてきた。そして、二十個のビー玉に好きな順番をつけていたのである。美しさの基準において、ナンバー1からナンバー20までを決めたのである。同じ色のビー玉が三個あったとしたら、中の、空気の泡のようなものの入り具合などで順序が決まってくる。泡の部分の微細な欠け具合も、順序に影響する。友人と遊ぶときに取られてもいいものと、絶対取られてはダメだというものも自分の中で決めていた。たくさん子どもがいても親は一人一人を間違えないというけれど、そのような形でビー玉になじんでいった。ビー玉はそれぞれ一個の小さな宇宙だった。

他の人から見れば、それはビー玉が二十個あるということでしかないだろう。しかし私の場合、ビー玉という一般名詞を超えて、一つ一つのビー玉の世話をしているような感じになっていた。まさに、自分の宝物だったのである。

子ども時代の刺激のなさが、そういう遊びにつながったのだろう。しかし、感覚を細分化していって、物の違いをどんどん見出し、奥に入りこんでいく――これは偉大な芸術、学問をなすときの態度に似てはいないだろうか。

だから、③大ざっぱな芸術というのはありえないのである。画家がおろそかに描いている部分というのは全くない。その一筆一筆がどのような影響を与えるかを綿密に感じながら、きっちりと仕上げてゆくのだ。

絵を描くというのは、人間にとってきわめてクリエイティブな行為である。単調な仕事の対極にある、創造的な行為と考えられている。そして、クリエイティブな仕事とは、天才の一瞬のひらめき、インスピレーションによって成し遂げられると考えられがちである。

しかし、これまで述べてきた画家たちのように、後世に残る絵画が、すべて天才の一瞬のインスピレーションだけで成り立ったかというと、実際にはそうではなかった。地味な作業の連続、地味な試行錯誤の中から、クリエイティブなものは生まれていった。私たちは天才のイメージについて、もういちど認識を新たにしなくてはならない。

出典　齋藤孝　『退屈力』

※1　プロヴァンス……フランス南部の地名。　※2　虚心坦懐……わだかまりがなくて、さっぱりした心。

問一　空欄A・Bに入る語句として最も適当なものを、次のア〜オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　むしろ　　イ　また　　ウ　しかし　　エ　いわば　　オ　しかも

問二　傍線部①「この一見地味に見える探究心」とありますが、この内容を次のようにまとめました。［Ⅰ］、［Ⅱ］に入る最も適切な語句を、［Ⅰ］は十字で、［Ⅱ］は十一字で、それぞれ傍線部①以前からそのまま抜き出しなさい。

サント・ヴィクトワール山の「見え方」「あり方」を、［Ⅰ］に観察し、［Ⅱ］なんとか画面上に再現しようとする強い気持ち。

問三　傍線部②「ぐーっとひきこまれてゆく自分を実感した」とありますが、筆者が絵にひきこまれたのはなぜですか。最も適当なものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　絵の中の牛乳やパンが、まるで実物のように見え、お腹がすいてきたから。
イ　家に帰ってその絵の複製画を眺めるたびに、本物の印象を思い出せるから。
ウ　その絵は、オランダ政府が流出をくいとめたという逸話のある名画だから。
エ　絵の中に、ありふれた日常生活の中にある一瞬の充実感を感じ取ったから。

問四　傍線部③「大ざっぱな芸術というのはありえないのである」とありますが、その理由を次のようにまとめました。空欄に入る言葉を、本文中から三十五字以内で抜き出しなさい。

偉大な芸術作品をなすには［　　　　　　］態度が必要だから。

問五　二重傍線部「『退屈力』」について、あとの各問いに答えなさい。

a　「退屈力」と対照的な意味で使われている言葉を、十五字で本文からそのまま抜き出しなさい。

b　次の【事例】の中には、ここで筆者が主張する「退屈力」には合わない点があります。この事例のどのような点が筆者の主張に合わないかを、五十字以内で具体的に書きなさい。

【事例】
ある中学校の野球部に所属するA君は、試合でホームランを打つことを目指して練習に励んでいた。筋力トレーニングや素振りなどの反復練習では、その後のバッティング練習に全力でのぞもうと、体力を使いすぎないよう、普段から少し力を抜いて取り組んでいた。実戦的なバッティング練習では、遠くへ強い打球を飛ばそうと積極的に取り組んだ。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

「私」は、魔術を使えるミスラ君のもとを訪れ、魔術を見せてもらう。ミスラ君は「魔術は誰にでも使えるが、欲を捨てなければならない」と「私」に言う。魔術を教わって一か月後、「私」は五、六人の友人の前で、暖炉から火のついた石炭を取り出して床に投げつけ、飛び散った火を無数の金貨に変えるという魔術を披露する。「私」がその金貨を暖炉に放り込もうとすると、友人が「骨牌で自分たちが勝ったらその金貨をそのままよこせ。」と言うが、「私」はそれを拒否する。

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手に、どうしても骨牌を闘わせなければならない羽目に立ち至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机を囲みながら、まだためらい勝ちな私を早く早くと急き立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々骨牌をしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌上手でもない私が、嘘のように（　A　）勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかったのが、（　B　）面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌を引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲き上げるつもりで、（　C　）骨牌を始めたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相さえ変るかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、（　D　）しまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、気違いのような勢いで、私の前に、札をつきつけながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、※1家作も、馬も、※2自働車も、一つ残らず賭けてしまう。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの※3刹那に欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐があるのでしょう。そう思うと私は①矢も楯もたまらなくなって、aそっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九。」

「王様（キング）。」

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ蒼（さお）になった相手の眼の前へ、引き当てた札（ふだ）を出して見せました。

すると不思議にもその骨牌（かるた）の王様（キング）が、まるで魂がはいったように、冠（かんむり）をかぶった頭を※4擡（もた）げて、bひょいと札（ふだ）の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、cにやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ②御帰リニナルソウダカラ、寝床（ねどこ）ノ仕度（したく）ハシナクテモ好（よ）イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚（あまあし）までが、急にまたあの大森の竹藪（たけやぶ）にしぶくような、寂しいざんざ降（ぶ）りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻（みまわ）すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌（かるた）の王様（キング）のような微笑を浮べているミスラ君と、向い合って坐（すわ）っていたのです。

私が指の間に挟（はさ）んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、私が一月（ひとつき）ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明（あきら）かになってしまったのです。私は恥（はずか）しそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、※5縁（えん）へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上に肘（ひじ）をついて、静（しずか）にこう私をたしなめました。

出典　『魔術』

※1　家作……家。　※2　自働車……自動車。　※3　刹那……瞬間。　※4　擡（もた）げる……持ち上げる。　※5　縁……縁側。

問一　（　Ａ　）～（　Ｄ　）を埋めるのに適当な語を次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　どんどん　　イ　とうとう　　ウ　ますます　　エ　だんだん　　オ　わざわざ

問二　傍線部①「矢(や)も楯(たて)もたまらなくなって」の意味として適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　気持ちが張りつめて、緊張が高まって
イ　物事が順調で、勢いが止まらなくなって
ウ　思いつめて、すぐに逃げ出したくなって
エ　気が急(せ)いて、じっとしていられなくなって

問三　太線部ａ「そっ」ｂ「ひょい」ｃ「にやり」のように、事物の状態や身ぶりの感じを表した言葉を何と言いますか。漢字三字で答えなさい。

問四　傍線部②「御帰リニナル」のように「私」が言われたのはなぜですか。本文中の語句を用いて二十字以上二十五字以内で説明しなさい。

問五　本文を前半と後半に分けた場合、後半の開始部分となる最初の五文字を抜き出しなさい。

問六　本文の作者は「あくたがわりゅうのすけ」です。「あくたがわりゅうのすけ」を漢字で正しく表記しなさい。また、作者の作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人間失格　　イ　羅生門　　ウ　高瀬舟　　エ　吾輩は猫である　　オ　銀河鉄道の夜

〔四〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

※1豊前（ぶぜん）の国の住人太郎※2入道（にゅうどう）と①いふ者ありけり。男なりけるとき（まだ出家していなかったとき）、常に猿を射けり。ある日、山を過ぐるに、大猿ありければ（大猿がいたので）、木に追い登らせて射たりけるほどに、②あやまたず（失敗せず）、かせぎに射てけり（木のまたに（いる猿を）射た）。すでに（今にも）木より落ちんとしけるが、何とやらん（何であろうか）、③物を木のまたに置くやうにするを④見れば、子猿なりけり。⑤おのが傷を負ひて土に落ちんとすれば、子猿を負ひたるを助けんとて、木のまたに⑥すゑん（置こう）としけるなり。子猿はまた、母につきて離れじ（離れまい）としけり。⑦かくたびたび（このように）すれども、なほ子猿つきければ、もろともに地に⑧落ちけり。それより長く、⑨猿を射ることをばとどめてけり。

出典　『古今著聞集』

※1　豊前……現在の福岡県と大分県の一部を合わせた地域。
※2　入道……仏門に入るために出家した人。

問一　傍線部①「いふ」・⑥「するん」の読みを現代仮名遣いで、ひらがなにして答えなさい。

問二　傍線部②「あやまた」・④「見れ」・⑧「落ち」について、活用形を次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　連体形　　エ　已然形

問三　傍線部③「物を木のまたに置くやうにする」について、その理由を本文中から十字前後で抜き出しなさい。

問四　傍線部⑤「おのが傷を負ひて土に落ちんとすれば」について、この動作の主語を本文中から二字で抜き出しなさい。

問五　傍線部⑦「かくたびたびすれども」について、具体的にどうしたのか二十字以内で答えなさい。

問六　傍線部⑨「猿を射ることをばとどめてけり」について、その理由についてある生徒たちが会話をしたものである。（　Ａ　）に入る具体的な内容を二十字以上二十五字以内で書きなさい。

生徒１「太郎入道はなぜ猿を射ることを止めて出家までしたのだろうか。」
生徒２「（　Ａ　）を後悔したからだろうね。」

〔五〕次の文章を読んで、次の各問いに答えなさい。

問一　次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ書き改めなさい。

①毎日ヘイオンに過ごす。　②ケンビ鏡で観察する。　③人ごみにマギれる。

④公園は憩いの場だ。　⑤文章を推敲する。　⑥参加者を募る。

問二　次の（　）に当てはまる語を漢字一字で答え、四字の熟語を完成させなさい。

①四面楚（　）　②温（　）知新　③絶（　）絶命

問三　次の①～③を、故事成語として正しい表現になるように、どちらかを選んで答えなさい。

①木に縁（よ）りて（　魚・鳥　）を求む　②間（　発・髪　）を容（い）れず　③（　孟・猛　）母三遷の教え

問四　次の①～③の傍線部と同じ働き・意味のものを、それぞれ後のア～ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

①今日は来ないようだ。

ア　まるで夢のようだ。　イ　少し塩辛いようだ。　ウ　明日は雨が降るようだ。

②彼は青森の生まれだそうだ。

ア　明日は雨が降るそうだ。　イ　それはおもしろそうだ。　ウ　とてもうれしそうだ。

③明日から試験だ。

ア　非常に静かだ。　イ　明日は休みだ。　ウ　朝はさわやかだ。

国語解答用紙

※印の欄には何も記入しないこと

〔一〕 10点
問一 2
問二 3
問三 3
問四 2

〔二〕 28点
問一 2×2 A B
問二 3 Ⅰ 3 Ⅱ
問三 2
問四 5
問五 3 a 8 b

〔三〕 24点
問一 2×4 A B C D
問二 2
問三 2
問四 5
問五 3
問六 2 漢字表記 2 作品

〔四〕 23点
問一 2×2 ① ⑥
問二 1×3 ② ④ ⑧
問三 4
問四 2
問五 5
問六 5

〔五〕 15点
問一 1×6 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥
問二 1×3 ① ② ③
問三 1×3 ① ② ③
問四 1×3 ① ② ③

受験番号

※

※ 〔一〕
※ 〔二〕 一・二・三・四
※ 〔二〕 五
※ 〔三〕 一・二・三
※ 〔三〕 四・五・六
※ 〔四〕 一・二・三・四
※ 〔四〕 五・六
※ 〔五〕

これから放送による聞き取りのテストを行います。はじめに、ある文章を読み、次にその内容についていくつかの質問をします。文章は一回しか読みませんので、必要に応じてメモを取ってもかまいません。それでは、約一分後に開始しますので、問題用紙や解答用紙に不備があった場合には、監督者に申し出て交換してください。

【一分】

それでは、始めます。

松の樹に囲まれた家の中に住んでいても松の樹の根が地中でどうなっているかはあまり考えてみた事がなかった。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、永いなじみである松の樹の全体であるような気持ちがしていた。

ある時、私は松の樹の生い育った小高い砂山を崩している所にたたずんで、砂の中に食い込んだ複雑な根を見まもることができた。地上と地下の姿が何とひどく相違していることだろう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、楽しそうに葉先をそろえた針葉と、――それに比べて地下の根は、戦い、もがき、苦しみ、精いっぱいの努力をつくしたように、枝から枝と分かれて、地上の枝幹の総量よりも多いと思われる太い根細い根の無数をもって、一斉に大地に抱きついている。私はこのような根が地下にあることを知ってはいた。しかしそれを目の前にまざまざと見たときには、思わず驚異の情に打たれぬわけには行かなかった。私は永いなじみの間に、このような地下の苦しみが不断に彼らにあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかったのである。しかも彼らは、我々の眼に秘められた地下の営みを、一日も怠ったことがないのであった。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、実はこのような苦労の上にのみ可能なのであった。

この時以来私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるようになった。彼らは我々とともに生きているのである。それは誰でも知っている事だが、私には新しい事実としか思えなかった。

成長を欲するものはまず根を確かにおろさなくてはならぬ。上にのびる事をのみ欲するな。まず下に食い入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き豊かな果実を結ぶ人がある。下に食い入る事に没頭していたからである。

根のためには、できるならば、地の質をえらばなくてはならぬ。

果実のためには、できるならば、根を培う肥料をえらばなくてはならぬ。

教養は培養である。それが有効であるためには、まず生活の大地に食い入ろうとする根がなくてはならぬ。人々はあまりに根の本能を忘れていはしないか。いかに貴い肥料が加えられても、それを吸収する力のない所では何の役にも立たない。私は教養の機会と材料とが我々の前に乏しいとは思わない。ただそれに相当する根が小さいのを忘れる。汝の根に注意を集めよ。

【三秒】

それでは質問にうつります。解答は全て解答用紙の決められたところに記入してください。

【三秒】

問一　筆者が、美しい赤褐色の幹や清らかな緑の葉を、永いなじみである松の樹全体であるような気持でいたのは、何について考えてみたことがなかったからですか。

【十五秒】

問二　筆者があらゆる植物に心から親しみを感じるようになったきっかけとは、どのようなできごとですか。

【十五秒】

問三　早年にして成長のとまる人があるのはなぜですか。

【十五秒】

問四　本文の趣旨と一致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　松の木に囲まれた家に住む筆者は、地中の根から地上の美しい幹、緑の葉に至るまで、松の樹全体をよく知っていた。

イ　成長を欲するものはまず上にのびることに没頭し、できるならば地の質や、根を培う肥料をえらばなくてはならない。

ウ　年をとってからでも美しい花を咲かせ果実を結ぶには、根に注意を払い、下に食い入ることに没頭すべきである。

エ　私たちには教養の機会と材料が乏しく、それに相当する根も小さいため、十分に根に注意を払うことができない。

【五秒】

これで放送によるテストを終わります。